

令和 4 年 6 月 3 日現在

機関番号：10102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K21954

研究課題名(和文)近世期仮名遣い研究史における『和字正濫鈔』の再定置

研究課題名(英文) Re-establishment of the Wajishoransho in the history of early modern kana usage research

研究代表者

久田 行雄 (Hisada, Yukio)

北海道教育大学・教育学部・講師

研究者番号：60883189

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は歴史的仮名遣いを発見したと評される契沖『和字正濫鈔』(元禄8年1695刊)の成果を、仮名遣いにおける学問の連続性という観点から捉え直すことを目指すものである。『和字正濫鈔』と先行する仮名遣い書を対照させ、影響関係を調査したところ、荒木田盛徴『類字仮名遣』(寛文6年1666刊)と『初心仮名遣』(元禄4年1691刊)と合致する語が少なからず存在することを明らかにし、『和字正濫鈔』は先行仮名遣い書の成果を取り入れた上で成立した可能性が高いことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

仮名遣い研究において画期的な成果と見なされてきた『和字正濫鈔』を、仮名遣いにおける学問の連続性という観点から捉え直したことの意義は大きい。また、『和字正濫鈔』に掲載された語を計量的に分析する方法は、今後、他の仮名遣い書研究にも活用できるものと期待される。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to reconsider the results of the Wajishoransho from the viewpoint of academic continuity. And it clarified it in practice. We have compiled basic information on the Wajishoransho by inputting data on the words, their annotations, sources, etc. The same process was also carried out for the preceding kana-usage books (Ruiji Kana-zukai and Shoshin Kana-zukai), and a comprehensive comparison and analysis of the Wajishoransho and the preceding kana scripts was conducted. The results of our research revealed that 922 words in the Ruiji Kana-zukai and 353 words in the Shoshin Kana-zukai match the 2,040 words in the Wajishoransho. In addition, when we look at the words for which no authority is given in the Wajishoransho, we find 504 words in the Ruiji Kana-zukai and 231 words in the Shoshin Kana-zukai that match, which is about 60% and 28% of the words for which no authority is given, respectively.

研究分野：国語学

キーワード：仮名遣い 契沖 和字正濫鈔

1. 研究開始当初の背景

江戸時代前期の古典学者である契沖(1640-1701)は、古事記や万葉集などの古代の文献において仮名の使い方に一定の規準が存在することを明らかにした。その成果は『和字正濫鈔』(元禄8年 1695 刊)において示されており、これが歴史的仮名遣いの発見といわれる。契沖の『和字正濫鈔』は仮名遣いに関する近代の研究において早くから着目され、『和字正濫鈔』の出版を境として、それまで重んじられてきた定家仮名遣いから歴史的仮名遣いへの転換が起きたと論じられてきた。しかし、その研究成果の画期性のために、『和字正濫鈔』と先行する仮名遣い書との関係は十分に検討されておらず、『和字正濫鈔』がそれ以前の仮名遣い書の成果をどの程度受け継いでいるのかについては不明なままであった。

2. 研究の目的

国学黎明期にあたる契沖の『和字正濫鈔』による成果が、それ以前の学問の実態とどのように連続しているのかを明らかにすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究では、『和字正濫鈔』とそれ以前の仮名遣い書のデータ入力とその整理、それらのデータを用いた比較・分析を行う。

先ず『和字正濫鈔』に記載された語彙や、その語釈・出典などをデータ入力し、情報を整理する。それらのデータを更に語釈や出典の情報によって分類・整理し、『和字正濫鈔』に関する基本的な情報を明らかにする。同一の作業を『和字正濫鈔』以前の仮名遣い書である荒木田盛徴『類字仮名遣』(寛文6年 1666 刊)と『初心仮名遣』(元禄4年 1691 刊)でも行う。

これらの作業を踏まえて、データを比較・分析する。仮名遣い書に掲載される語の配列は、それぞれの文献によって意義分類やいろは順と異なるため、データを使って比較を行うことが有効である。比較・検討を行う際には、特に『和字正濫鈔』において出典が明記されていない語に着目する。『和字正濫鈔』は他の仮名遣い書とは異なり、表記の典拠を示した点に特徴があるが、必ずしも全ての語に典拠が示されているわけではない。比較作業を通して、これらの語が先行仮名遣い書に確認することができるかどうかを具体的に検討し、『和字正濫鈔』が先行仮名遣い書を参照していたかどうかを明らかにする。

4. 研究成果

上記の目的・方法に基づいて、以下の研究成果の公表を行った。

(1) 『和字正濫鈔』の基本的な情報の解明

『和字正濫鈔』のデータ入力を行い、基本的な情報を整理した。『和字正濫鈔』は5巻5冊からなる書物であり、仮名遣いに関する語が掲載されているのは巻2から巻5である。作業の結果、巻2から巻5に掲載された語の総数は2040語であることが明らかとなった。巻2が571語、巻3が462語、巻4が570語、巻5が437語である。なお、同じ語が複数箇所に掲載されることがあるため、先に示した2040語は述べ語数であり、異なり語数は1935語である。

『和字正濫鈔』において表記の典拠が記載されているかどうかの有無を調査したところ、典拠が記載されていない語は、全2040語の中で837語(約41%)であることが明らかとなった。それぞれの巻における表記の典拠無し語の割合は、巻2・巻3・巻4がそれぞれ約37%、約32%、約41%であったのに対し、巻5は約55%と、他の巻に比べて割合が高いことが明らかとなった。

また、表記の典拠として記載されている文献は全部で49種類あり、その中で最も多く記載されているのは『和名類聚抄』であることを明らかにした。『和名類聚抄』が典拠として記される語は805語あり、これは全体の約39%に当たる。その他に多く記載されている文献としては、『日本書紀』(218語)や『万葉集』(206語)、『古事記』(29語)が挙げられるが、『和名類聚抄』と比べるとあまり利用されていないことが指摘できる。なお、上記の文献以外の文献を典拠としている数はそれらよりもさらに少ないことも明らかにした。

この成果は『和字正濫鈔』における典拠小考(『国語論集』18、2021年)にまとめた。

(2) 『和字正濫鈔』における『和名類聚抄』利用の実態

上述したとおり、『和字正濫鈔』において『和名類聚抄』が典拠として多く記載されていることから、契沖が『和字正濫鈔』を執筆する上で『和名類聚抄』を重要視していたことが分かる。そこで、『和字正濫鈔』に記載された『和名類聚抄』の記述を江戸時代に出版された『和名類聚抄』の数種と比較することで、契沖が参照したであろう『和名類聚抄』について検討を行った。

調査の結果、『和字正濫鈔』に見られる『和名類聚抄』の記述は、寛文7年版の『和名類

聚抄』に近いことを明らかにした。先行研究においても寛文7年版に拠っている可能性が高いことが指摘されていたが、本研究の調査でも追認された。なお、『和字正濫鈔』に記載された『和名類聚抄』の記述が寛文7年版とすべて合致するわけではないことが明らかとなったため、契沖が『和名類聚抄』をどのように利用していたのかについては更なる検討が必要であることを述べた。

この成果は「『和字正濫鈔』における典拠小考」(『国語論集』18、2021年)にまとめた。

(3) 『和字正濫鈔』と『類字仮名遣』『初心仮名遣』の書承関係

『和字正濫鈔』と同様に、『類字仮名遣』『初心仮名遣』についてもデータを作成し、基本的な情報を整理した。その後、比較作業を行い、関係性を調査した。

調査の結果、『和字正濫鈔』の2040語と合致するものは、『類字仮名遣』で922語、『初心仮名遣』で353語であることが明らかとなった。これはそれぞれ『和字正濫鈔』の約45%と約17%にあたる。『初心仮名遣』との合致率は約17%と高くはないものの、『類字仮名遣』との合致率は約45%であり、5割には達しないもののその割合は低くないことが指摘できる。また、これら両書をあわせた合致する語の総数は991語であり、『和字正濫鈔』の約49%にあたる。

また、『和字正濫鈔』において典拠が記されていない語に着目すると、合致するのは、それぞれ504語、231語であり、これらは典拠がない語の約60%と約28%にあたる。これら両書をあわせた合致する語の総数は542語であり、典拠のない語の約65%にあたる。このことから、『和字正濫鈔』はそれまでの仮名遣い書の研究成果をある程度は引き継いでいるものであるといえることを指摘した。なお、『類字仮名遣』や『初心仮名遣』に記載された語は、他の仮名遣い書と合致するものもあるはずであるため、今後、他の仮名遣い書(特に定家仮名遣い系統の『仮名文字遣』)との比較作業も行う必要があることを指摘した。

この成果は「近世仮名遣い研究史における『和字正濫鈔』の再検討—『類字仮名遣』と『初心仮名遣』との比較から—」(『語学文学』60、2021年)にまとめた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 久田行雄	4. 巻 60
2. 論文標題 近世仮名遣い研究史における『和字正濫鈔』の再検討 『類字仮名遣』と『初心仮名遣』との比較から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学文学	6. 最初と最後の頁 46-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 久田行雄	4. 巻 18
2. 論文標題 『和字正濫鈔』における典拠小考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語論集	6. 最初と最後の頁 347-356
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 久田行雄
2. 発表標題 『和字正濫鈔』における 先行仮名遣い書の利用について 典拠なしの語に注目して
3. 学会等名 令和3年度語学文学学会研究発表会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究の途中で作成した仮名遣い書のデータは、リサーチマップで公開する予定である。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------